

徳島・南前川町一丁目遺跡

みなみまえがわちょう

である池状遺構から二〇点以上の墨書き木製品が出土した（本誌第二三号）。



(徳島)

遺跡は新町川・助任川などの網目状に流れる河川によって分かれ
る徳島城下町各地区「島」のうちの一つ、助任・前川地区に位置す
る。同地区は徳島城の北側
にあたり、主として中・下
級武士の居宅として積極的
な開発対象となっていたこ
とが知られている。近接地
の遺跡として、同地区内の
中前川町二丁目遺跡が一九
九九年度に調査され、武家
屋敷地の一角のゴミ捨て場

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 所在地 | 徳島市南前川町一丁目 |
| 調査期間 | 二〇〇〇年(平12)四月～八月 |
| 発掘機関 | (財)徳島県埋蔵文化財センター |
| 調査担当者 | 谷 恒一・前川直江 |
| 遺跡の種類 | 城下町 |
| 遺跡の年代 | 江戸時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

遺跡は新町川・助任川などの網目状に流れる河川によって分かれ
る徳島城下町各地区「島」のうちの一つ、助任・前川地区に位置す
る。同地区は徳島城の北側

にあたり、主として中・下

級武士の居宅として積極的

な開発対象となっていたこ

とが知られている。近接地

の遺跡として、同地区内の

中前川町二丁目遺跡が一九

九九年度に調査され、武家
屋敷地の一角のゴミ捨て場
木簡が一二点、第三遺構面の池状遺構(SL300-1)から出土
遺構面は三面が検出され、最も下層の第三遺構面は一七世紀中葉
から一九世紀中葉まで、第二遺構面が一九世紀から江戸時代末期、
第一遺構面が明治初頭と考えられる。各遺構面で屋敷境界となる溝
が検出されている(第三遺構面SD300-1・第二遺構面SD200-1、
第一遺構面SD100-1・SD100-2)。いずれも、石組みなどを伴
わない素掘りの構造で、年代が下るにつれて幅が狭まる。

ある池状遺構から二〇点以上の墨書き木製品が出土した（本誌第二三号）。
南前川町一丁目遺跡は、絵図との対照から、宅地化の年代や屋敷
の家主の変遷の状況が判明している。一六五〇年以前のいくつかの
絵図では、助任川の流路内に相当し、この段階での宅地化は行なわ
れていない。寛文六年(一六六五)の絵図では、川岸部分の開発を
経て「侍屋敷」と表記されている。元禄四年(一六九一)の絵図に
初めて境界の表現と辯領者の名が記され、以降は東西の二区画が二
武家の宅地であったことが判明している。元禄四年から享保年間
(一七一六～一七三六)では速水家(西)と山崎家(東)の二家、天
明年間(一七七一～一七八九)から安政年間(一八五四～一八六〇)で
は速水家(西)と佐山家(東)の二家、明治二年・三年では速水家
(西)と村田家(東)の二家の所在が確認される。山崎家は断絶し
た可能性がある。

遺構面は三面が検出され、最も下層の第三遺構面は一七世紀中葉
から一九世紀中葉まで、第二遺構面が一九世紀から江戸時代末期、
第一遺構面が明治初頭と考えられる。各遺構面で屋敷境界となる溝
が検出されている(第三遺構面SD300-1・第二遺構面SD200-1、
第一遺構面SD100-1・SD100-2)。いずれも、石組みなどを伴
はない素掘りの構造で、年代が下るにつれて幅が狭まる。

木簡が一二点、第三遺構面の池状遺構(SL300-1)から出土

した。○二二〇〇一は長大な隅丸長方形で長軸一七・七m短軸七・〇m、最大の深さは〇・六mを測る。埋土は大別して最下層・下層・中層・上層の四つに分けられるが、異なる層位から出土した遺物に接合関係があり、層序が明確な時期差を反映していない。木簡(1)～(8)は下層に、(9)～(12)は中層に伴うものである。出土遺物からみた池の年代は一八三〇～一八六〇年が中心で、明治初年には埋められていたと考えられる。

8 木簡の内容・訛文

- | | | | | |
|-----|-------------|----------------|------|----------|
| (1) | ・「▽船 ■ □□中」 | 135×30×5 033 | (7) | ・「野カ山」 |
| (2) | ・「▽□原ノ元太」 | | (8) | ・「□□」 |
| (3) | ・「▽川口罷出者□」 | | (9) | ・「▽内田□中」 |
| (4) | ・「▽那賀郡山口村□」 | (125)×27×4 039 | (10) | ・「▽□□」 |
| (5) | □□ | (131)×28×3 081 | (11) | ・「□□」 |
| (6) | ・「□□」 | | (12) | ・「□」 |
| | □□ | | | ・「□□」 |
| | | | | ・「野カ山」 |
- 38×26×17 061
50×27×17 061
(134)×30×3 033
150×(27)×6 081
222×38×6 011
97×62×11 061

(1)(2)(9)は荷札木簡、(7)(8)は絵合わせとみられる遊戯具、(12)は平面形雲形を呈する装飾材である。文字はその側面にある。

(1)の「ノ元」は「メ吉」の可能性もある。

(2)の木簡にみえる那賀郡山口村は現在の阿南市山口町にあたる。山口村の天保五年（一八三四年）段階の村高九二一石余には、藩士の知行地と徳島藩領が混在しており、七人の知行地の中には絵図にも

(110)×(21)×7 081
(81)×(57)×7 081

確認される佐山家の名がある。山口村は那賀郡・阿南市などを流れ

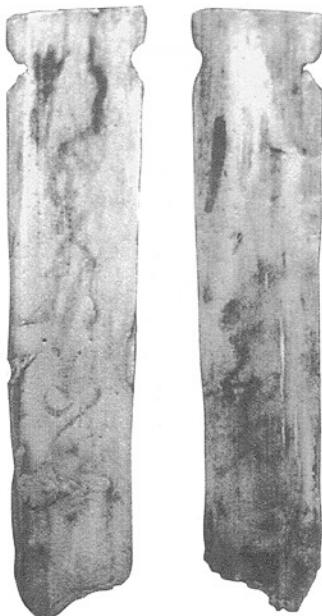
る桑野川に隣接しており、この木簡は河川に設けられた番所を通過する際の許可証である。河川を経路とした物資の運搬状況を示すものと推定される。

徳島藩の在地支配制度として、藩士とその領地との直接的な関係を示す地方知行制がある。文献からの検討も行なわれているが、出土木簡にもその状況を示す事例が増加している。中徳島町二丁目遺

跡（本誌第二三二号の徳島城下町跡）、中前川町一丁目遺跡（本誌第二三三号）がそれに相当する。所属年代や藩士の石高、所領地の分布など的情報が蓄積されつつある。それに伴い、物資の流通状況もより具体的になってきていている。

執筆にあたって、報告書作成時の木簡釈読者である根津寿夫氏

（徳島市立徳島城博物館）のご教示を得た。



(2)

9 関係文献

徳島県教育委員会・財徳島県埋蔵文化財センター『南前川町一丁目遺跡——鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書——』（徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第三六集）（2002年）
（藤川智之）

木簡学会役員（2001・02年度）

監事	佐藤 宗諱	田辺 征夫	佐藤 信	寺崎 保広
副会長	鎌田 元一	岩本 正二	西山 良平	平川 南
委員	今泉 隆雄	清水 みき	館野 和己	山下信一郎
本郷 真紹	土橋 誠	吉川 真司	和田 萍	
山中 敏史	渡辺 晃宏	東野 治之	鶴見 浩幸	
市 大樹	石上 英一	岩宮 隆司	吉川 基	
鈴木 景二	竹内 亮	鶴見 泰寿	横内 裕人	
西村さとみ	馬場	古尾谷知浩		
吉川	山本			
崇徳	聰 崇			
吉江	増渕			